の念を捨てかねて居る人もありますからねえ。實際また、外部から獲られる最善最大のものもですね、彼等自身の憐れむべき性質と幾らかでも調和させる爲には、先もつて彼等の考で出來るだけ縮少しなければならないのですよ。」

八

その夜法師はミニヨンの葬儀に一同を喚んだ。人々は例の「往昔館」へ行つて見ると、そこは珍らしく飾りたてたり燈がとぼしてあつた。壁は縹色の毛氈で上から下まで被はれて、唯だ長押や床が見えて居るだけであつた。隅々の四つの燭臺の上には四本の大きな蠟燭が燃えて居り、中央の棺を圍む小さな四つの燭臺には小さなのがとぼつてゐた。又棺のそばには、銀をまじへた縹色の服裝をした四人の童が立つて、棺の上に安臥して居るものに廣い駄鳥の羽團扇で靜に風を送つて居る樣子である。一同は席についた。すると目には見えぬ二組の合唱が優しい歌聲で訊きはじめた。『誰をか運び來れる此の靜かな團欒に。』すると四人の童は愛らしい聲で、『つかれし友を運び來りぬ。天の姉妹の歡びの聲、いつかまた覺まさんまで、お身等のもとに憩はしめよ』とうたひかへした。

合唱

この團欒には初の若人ぞ。よくこそ來れ。歎きつゝもいざ迎へん。これよりは童男もな來そ、少女もな來そ。たゞ老いたるもののみ、心よく安らかに、この靜かなる室にこそ入れ。この愛しきめぐしき子のみ嚴き團欒に憩はしめ。

童男

あはれ、いかにわれら、こを運びくるを歎きしか。あゝされど、こはこゝに居るべき運命。われらも暫しこゝにあらしめ、泣かしめよ、泣かしめよ、この棺のべに泣かしめよ。

合唱

さはれ見よこの強き翼を。見よこのうるはしき輕羅の衣を。黃金に光る頭のリボンよ。見よこの美しき氣高き休憩を。

童男

あゝさはれ、翼にも飛び得ず。快き遊びにも綾羅は舞はじ。頭に薔薇を飾りし時、われらを視つめし、その優しき愛しき眼なざしよ。

合唱

たましひの眼もてかなたを視よ。最美のもの最高のものを、人生を、星のかなたに運ぶ創造の力お身等に目ざめよ。

童男

あゝされど、彼女はあらず。庭をさまよふこともなく、草野の花を摘みもせじ。われらをこゝに泣かしめよ。彼女をこゝに置くなべに。われらをこゝに泣かしめよ。こゝに彼女のそばちかく。

合唱

子どもらよ、歸れよ生に。迂紆る川邊をそよげる風に、お身らの涙を吸はしめよ。のがれよ夜を。晝と歡樂と永續こそ、生けるものの運命なれば。

童男

さらばいざ！　生に還らん。晝は仕事と歡樂と。夕はともに休憩をうけ、夜の眠りに蘇生へらむ。

合唱

子どもらよ、急げよ生に。美しき人の綾羅の衣に。神々しき眼なざしと永生の花冠もて、

愛はお身らに寄り來らむ。

童らは既に退いてゐた。法師は其席から立上つて棺のうしろに進みよつて云つた。「新たにここに住むべき人が來ると嚴かな式で迎へ入れようといふのが、此の寂かな安住を建てた人の指圖だつたのです。して此家の建設者であり、この場所の創始者であるあの人のあとでは、初めて一人の若い旅人をこゝへ葬りました。ですから此狹い場所も、もう既に、かの嚴しい我儘なそして假借のない死神の全く異つた犧牲を二人藏めて居るわけです。既定の天則によつて吾々は生れて來るのです。で、光を見るだけに熟する迄の日數はちやんと定つて居りますが、しかし壽命には何の法則もないのです。最も弱い命の絲が意外に長く延びることもあり、最も強い線が却つて、矛盾を好む運命の神の鋏に酷たらしうも截られてしまふものです。今日こゝに葬つた子供に就いては、私どもは何も存じません。何處のはてから、來たものやら、どういふ親の子供やらも知らず、年齢さへも唯だ推量するだけなのです。その深く祕めた胸は、奥底の事情に就いては殆ど何も洩らしませんでした。唯だ或る亂暴者の手からそれを救つてやつた其男のかたに對する愛よりほかには、此子については何一つ明かな事も、何一つ知れた事も無いのです。この可憐なる愛情と、